

## ウンベルト・エーコとイタリアの記憶

報告 小久保真理江

本講演会はウンベルト・エーコの二冊の翻訳書刊行を記念して総合文化研究所で開催された。二冊の翻訳書とは、講演録『ウンベルト・エーコの小説講座——若き作家の告白』（和田忠彦・小久保真理江共訳、筑摩書房、二〇一七年）と小説『女王ロアーナ、神秘の炎』（和田忠彦訳、岩波書店、二〇一八年）である。司会の山口裕之氏の挨拶・趣旨説明のあと、小久保真理江（東京外国語大学特任講師）と和田忠彦氏（東京外国語大学名誉教授）がそれぞれ講演を行い、互いの発表内容についてのコメントを加えたうえで、会場からの質問を受け付けるという形で会は進行した。

前半の講演「ウンベルト・エーコ、ファシズムとアメリカ文化の記憶」では本報告文執筆者である小久保真理江が、『女王ロアーナ、神秘の炎』のなかでファシズム期のイタリア文化がどのように描かれているのかを分析し、エーコの評論との接点について論じた。

二〇〇四年にイタリアで出版された『女王ロアーナ、神秘の炎』は、自伝的記憶を失った主人公が長年足を踏み入れていなかった故郷の家に戻り、子供時代の品々（主にファシズム政権下のイタリアで流通していた本・雑誌・漫画・レコードなど）と向かい合いながら、自らの過去を知り自伝的記憶を取り戻そうと

する物語である。

講演ではまず、この小説のなかでファシズム期の文化の多面性やさまざまな種の矛盾が「分裂」として繰り返し描かれていることを示した。さらに、この小説ではファシズム期のイタリアで流通していたアメリカ由来の大衆文化の品々（小説・漫画・音楽・映画など）に関する描写が多いことに触れ、こうしたアメリカの大衆文化がファシズム文化のなかに取り込まれていく側面と、体制の文化に対するオルタナティブ・モデルとして機能する側面の両面が描かれていることを指摘した。そのうえで、大衆文化・記憶・ファシズム・アメリカ文化などに関するエーコの論考に言及し、この小説との接点について論じた。なお、この講演の内容は、考察を深めた形で近く論文として発表する予定であり、現在執筆を進めている。

つづく後半の講演「作家エーコの軌跡にみる『永遠のファシズム』」では、和田忠彦氏が、エーコの幅広い活動の軌跡を紹介したうえで、講演「永遠のファシズム」と小説『女王ロアーナ、神秘の炎』を中心にエーコの著作や思想・理論について論じた。トマス・アクイナスの美学についての卒業論文でトリノ大学を卒業した若きエーコは、国営放送局に就職し文化番組の製作に携わった。その後、編集者として出版社で活躍したほか、『開

かれた作品』などの自らの理論的著作を出版した。一九七〇年代にはボローニャ大学で教鞭を取りながら『記号論』をはじめとする数々の著作を出版し、記号学者として名を馳せた。一九八〇年には四十八歳で初の小説『薔薇の名前』を世に送り出し、世界的なベストセラー作家となった。

小説家として活躍する以前に、エーコがルチアーノ・ベリオなどの前衛的音楽家とともにメディア実験の担い手になったことや、漫画『ピナッツ』をイタリアに紹介したこと、古代から現代までの広範で深い知識を基盤に大衆文化の研究・批評をイタリアでいち早く行ったことなどに和田氏は言及し、学者や小説家という枠には収まらない文化の担い手としてのエーコの重要性や先駆性を論じた。

また、記憶の問題がエーコにとって一貫して重要なテーマであったことに言及しつつ、ファシズムについてのエーコの講演「永遠のファシズム」の文脈や意義について論じ、エーコの挙げた「原ファシズムの十四の特徴」を引用した。

さらに、『女王ローアナ、神秘の炎』に多数の文学作品に関する引用・言及が散りばめられていることに触れ、こうした凝った仕掛けと『開かれた作品』や『エーコの文学講義——小説の森散策』などの著作に見られるエーコの文学理論(特に「モデル読者」の概念)とのつながりについて論じた。

講演の最後に和田氏は、エーコとイタロ・カルヴィーノとの関係について言及し、エーコがカルヴィーノの書いたような優れた短編小説作品に憧れつつも短編小説を書けなかったことや、週刊誌『エスプレッソ (L'Espresso)』における連載コラムが短編の執筆に代わるものであったことを指摘した。

前半の小久保の講演と後半の和田氏の講演は、エーコの著作についてそれぞれ異なるアプローチから論じながらも、ともに「記憶」や「ファシズム」を中心テーマとして扱い、数多くの接点を持つものであった。両者がともに引用した「永遠のファシズム」は一九九五年に行われた講演の記録であり、現在とは異なる政治・社会状況のなかで発せられた言葉であるが、二〇一九年現在に読んでもまったく古びてはおらず、むしろ現在の世界に広がっているファシズム的なものの姿を鋭く言い当てているように思われる。イタリアではこの講演録が二〇一八年に小冊子『Il fascismo eterno (永遠のファシズム)』として再び出版されている。また、日本ではこの講演録が収録された書籍の邦訳『永遠のファシズム』がやはり二〇一八年に文庫本として再び出版された。こうしたことも示しているように、ファシズムについてのエーコの論考は、現在の政治・社会状況について考えるためにも非常に重要な論考として再び読まれている。

発表日 二〇一八年六月二十一日(木)